

わかりやすい生命倫理入門講座－問題を考えるための枠組み－

徳島大学総合科学部 准教授
土屋敦(医療社会学)

皆さんは、「生命倫理」という言葉を聴いてどのような問題を思い浮かべるでしょうか？

ある方は、終末期医療や看取りの医療、そして安楽死や尊厳死のあり方など、「生命の終わり」をめぐる倫理問題を思い浮かべるかも知れません。また、ある方は妊娠中にお腹の中の赤ちゃんの障害の有無を調べる出生前検査や、結果障害と分かった場合に中絶を行う選択的中絶の是非論など、「生命の始まり」をめぐる倫理問題を思い浮かべる方もおられるかも知れません。またある方は、iPS細胞から精子や卵子などの生殖細胞を作成することや、ゲノム編集やミトコンドリア置換などの先端生命科学技術を用いて生命操作することへの倫理問題を思い浮かべる方もおられるかも知れません。

「生命倫理」と聞くと、難しく思われる方も多いかも知れません。しかし、私も含めて人間は誰でもこの世に生を受けて、人生を謳歌し、そしていつかは亡くなるのです。ご自身の子どもさんが生まれるとき、ご自身のご両親や祖父母の方が亡くなる時など、「生命の始まり」や「生命の終わり」に関する倫理的問題に直面する機会はさまざまなライフステージの中で多くの方が往々にして直面する問題としてあります。「生命倫理」は決して高尚なものではなく、われわれの生活にごくごく身近に存在する問題です。

この公開講義は、「わかりやすい生命倫理入門講座－問題を考えるための枠組み－」と題されています。生命倫理の問題を「わかりやすく」解説することも念頭に置いています。最大のポイントは副題の「問題を考えるための枠組み」を解説していく点にあります。近年、「最期まで自分らしく」「治療方針の決定や治療の差し控えはインフォームド・コンセントを得た上で」といった言葉が社会の中で大きく広まりましたが、こうした考え方の根底には、生命倫理における自己決定権や自律尊重の原則といった考え方があります。このクライアントの自己決定権や自律尊重という原則の成り立ちを考えてもらうとともに、実際の事例に即して議論してもらうことがこの公開講座の趣旨です。

「最期まで自分らしく」「治療方針の決定や治療の差し控えはインフォームド・コンセントを得た上で」といった理念の基盤になっている自己決定権や自律尊重の原則といった考え方は、かつてヒトラーのナチス政権下のドイツで行われた人体実験などの残忍な医学研究を「負の遺産」としながら、そうした負の歴史への「反省」から形成された経緯を御存じの方もおられるかも知れ

ません。今では、本人が同意しない治療を強制することや、危険性などが十分に説明されない医学研究は行われず、行っても「当たり前」になっています。ですが、それが当たり前ではなかった時代があったことを歴史は物語っています。ナチス政権下では、約600万人のユダヤ人が強制収容所の中で殺害され、また知的障害を持つ人々、精神障害を持つ人々、ジプシーであった人々への殺害も含めると約1100万人の方々が強制収容所の中で命を落としました。これは現在の東京都の全人口とほぼ同数に該当します。またナチス政権下では、毒ガス実験やマラリア感染実験など、多くの残忍な人体医学実験が行われてきました。

なぜ生命倫理が必要とされたのか？またそこで歴史的に勝ち取られた理念とはいかなるものだったのか？現代社会における生命倫理問題を考えるヒントは、こうした「負の遺産」を人々がどのように「反省」してきたのか、という点に多くの主題が隠れています。またそれは、現在の終末期の場における積極的な治療の差し控え問題を考える際や、脳死体からの臓器移植を考える際などの、生命倫理問題を考える際に大きな影響力を持っています。

問題をきちんと考えてみたいあなたに、生命倫理の問題に遭遇し悩んだことがあるあなたに、是非おすすめしたい講座です。是非お気軽に足をお運びください。

総合科学部公開セミナー

第3回：3月24日(金) 18:30～20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館南棟3階 第1会議室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先：

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksoumks@tokushima-u.ac.jp

